

生涯学習としての合唱活動の一試案

ー白いうた青いうたフェスティバルの実践を通してー

日 吉 武〔鹿児島大学教育学部（音楽教育）〕

A Proposal for Chorus Activities in Lifelong Learning: Through the Educational Practice on a Festival of Shiroiuta Aoiuta

HIYOSHI Takeshi

キーワード：合唱曲集「白いうた青いうた」、世代間、フェスティバル、公募合唱団

1. はじめに

合唱曲集「白いうた青いうた」は詩人、谷川雁氏と作曲家、新実徳英氏の合作による二部合唱曲集である。現在、筆者が会長を務めている「白いうた青いうたフェスティバル in kagomma 実行委員会」では、この曲集を歌い合う合唱活動として「白いうた青いうたフェスティバル in kagomma」を2004年に立ち上げ、平成20年9月まで計5回開催してきた。^{*1}

このフェスティバルは、「白いうた青いうた」を柱に「歌う心」にスポットを当て、歌（合唱）を通じ世代を越えて幅広く多くの人々が共有できる文化的学習活動を目指したものである。また子どもから高齢者まで老若男女を問わず集い、歌い合い、聴き合うという体験や感動を共有する「場」を創造するという目的を持った合唱活動でもある。

上記のような目的のもと回を重ねてきたフェスティバルではあるが、第5回という節目を終え、6回目以降の新たな5年に踏み出そうという今、これまでの活動の成果や意義を捉え直すことが、生涯学習の機会としてのさらなる発展に有効であると考えます。

そこで本研究は、合唱曲集「白いうた青いうた」の特徴について改めて捉え直すとともに、これまでのフェスティバル活動の成果と課題を検証し、世代間をつなぐ文化活動としての合唱活動の意義について追究することを目指した。

2. 「白いうた青いうた」について

「白いうた青いうた」は二部合唱曲として全部

で53曲が連作された。

この曲集の特徴をまとめると、次の三点を挙げることができる。

- ①作曲が先で、その後に詞がつけられるというスタイルで作られている。
- ②多様な歌唱形態で歌えるように作曲されている。
- ③幅広い年齢層をつなぐ歌として作られている。

①作曲が先で、その後に詞がつけられるというスタイルで作られている。

この点について作曲家新実氏は次のように述べている。

「〈前略〉中学、高校生がうたえる歌が欲しいという要望が常にある。詞をみると、日は輝き、木々は緑、空は青く、雲は白い、という感じがかなり多く、どうもそれが僕にはづらい。このシリーズを始めた動機は、そういう詞で作曲するのが辛い気持ちがしてきたことがまず一つ。もう一つは、純粹に音の面からの動機です。主旋律があって、それに単なる3度下の音をつけてハモる、というもののじゃつまらない。非常にシンプルなメロディと、声部がなるべく独立した対旋律による二部合唱をつくりたい。〈中略〉音が独立性を持つということは、先に詞があるとなかなか難しいことなんです。」^{*2}

ありきたりな詞に満足しないという気概や旋律創作や二部合唱への新鮮な創作思考を感じる言葉である。このような作曲者の思いが、この曲集の

作曲スタイルの根底にある。

歌曲を作るとき、特にクラシックのジャンルでは、作曲家によって詞がまず選ばれ、それに音、旋律がつけられるのが普通のスタイルである。しかし、この曲集の全曲はそれとは全く逆のスタイル、即ち旋律が先に作られ、それが詩人のもとに送られ、そして詞がつけられる、という形で生み出されたのである。

またこの作曲スタイルは、詞にしばられない多様な旋律創作を可能にした。新実氏は次のようにも述べている。「月に一度、自分の中から、あるいは世界中のいろんな民謡、民族音楽から気に入った節を拾い出し、一篇の歌に仕上げる。」^{*3}

「やり方をついでに説明しますと、僕はまず、ヨーロッパの旋律、日本、アジアの旋法をもとにして曲をつくります。」^{*4}

つまり、この曲集には様々な地域の音楽、様々な表情の音楽が数多く詰まっているということである。音楽性の多様さもまた味わえる曲集ということになる。加えて自由な旋律創作は、拍子やリズム、速度、形式等、音楽的な特徴の面でもこの曲集に多様性をもたらすことになったのである。

作詞の谷川雁氏はこの作曲スタイルについて次のように述べる。

「例によって新実さんは重いもの軽いもの、速いものおそいもの、さまざまな国の匂いがする曲を送ってきました。郵便包みからカセットをとりだし、譜面に合わせて聴くピアノの音は、まず私にこう言います。―田舎ものがんこじいさん、あんたにも別の人生があったかもしれないのに。それはこんな風な一節だったかもしれないのに。―」^{*5}

この曲集の旋律の魅力、その効果を擬人化した表現で言い表した一文である。谷川氏もこの旋律（音楽）が先で詞が後であるという作曲スタイルに共感していたことがよく表れている。

②多様な歌唱形態で歌えるように作曲されている。

この合唱曲集は二部合唱曲であり、合唱としての難易度は低めである。また合唱パートはすべてト音譜表で書かれており、児童にも女声にも男声にも対応できるようになっている。そのため様々

な歌唱形態での演奏が可能である。

この点について作曲家新実氏は先に紹介した文章の中で次のように述べている。

「非常にシンプルなメロディと、声部がなるべく独立した対旋律による二部合唱をつくりたい。それは一人ずつでも歌える。男と女でもできるし、男同士でも女同士でもできる。同声合唱でも混声合唱でもできる。そういうものをつくりたいと思ったわけです。」^{*6}

楽曲が歌唱形態や演奏者を限定しないということも、この曲集の大きな特徴である。

③幅広い年齢層をつなぐ歌として作られている。

作詞の谷川氏は、この曲集を作り始めた当初の思いについて次のように述べている。

「〈前略〉宮沢賢治の童話をテープ化し、絵本化して、それを子どもたちが再表現していくというグループがありまして、〈中略〉そのグループにうたわせれば喜ぶんじゃないかということがこちらの胸算用にあって、二〜三曲できたところでそれを投げかけてみたら、連中もなかなかいいというわけです。こちらもそれで勇気づいて、合唱団をつくれとって、小学校の三年生ぐらいから中学、高校、大学、社会人の男女を含んでいる、ちょっとふしぎな、にぎやかな合唱団が百人ばかりできて、月に一回うたっているんですけど、二カ月に一度は新実さんに指導してもらおう。(後略)」^{*7}

曲集の作曲・作詞が幅広い年齢層の人々の集まり、そして後には合唱団を念頭において進められていたことを示す言葉である。谷川氏はさらに次のようにも述べている。

「〈前略〉まあ、お父さん世代の新実さんが作曲する。おじいさん世代の僕が言葉をつける。それを息子、娘に歌いなさい、ということで、合唱団だけでなしに、すぐそのまわりにいる同じグループの仲間にも波及しますから、規模は大きくないけれども、僕に言わせれば理想的な形になっている。そういう形こそが、音楽というものに含まれている教育的性格ではなかろうか。つまり、何がよくて何がいけないかということはおのずからそういう三世代の結合の中でふるい分けられ、受け入れられていく。」^{*8}

この曲集を創り、それが歌われることによって生み出される音楽が三世代をつなぐということが、まずこの曲集の持つすばらしい意義である、ということである。さらに加えて、世代のつながりの中で音楽的な面だけでなく、心の部分での向上も図られるという教育的意義にも谷川氏は目を向けている。

若い世代の心のあり方へ上の世代がアプローチするという、そして歌というものの教育的意義ということについて、谷川氏はこの曲集第①巻の序文「三世代りレーからの贈り物」の中でもふれている。

戦争を十代で体験した谷川氏は、戦争中軍歌や流行歌を歌っていた体験の中で、心にしみたものは外国の歌曲であったこと、しかしそれが非常によそよそしい感じがしたことを記している。そして母国語の歌がほしいという思いを持っていたことを明かし、次のように述べるのである。

「戦争が終わっても、十代の明暗を卒直に告白して気品を失わない歌は多くありません。〈中略〉それだけにアドレッセンス前期の感情を年長者が歌のかたちできっぱり（代弁）してやる必要があるのです。でないとやたらにどなったりだまりこんだり、歌うことのない心ができてしまう恐れがあります。」^{*9}

「白いうた青いうた」の当初の狙いが歌を生み出す年長者と十代を、歌がつなぎ、そして十代の心に働きかけ教えていく、ということにあったことを示す一文である。

筆者は特に「やたらにどなったりだまりこんだり、歌うことのない心ができてしまう恐れがある」という部分に共感する。中学校の教員から大学まで若い世代を教える仕事に携わる中で、彼らが感情をうまくコントロールできない場面に数多く出会ってきた。そのような心に、歌によって解放と示唆や導きを与えるということは、音楽の教育内容として重要であると考えます。

「白いうた青いうた」はその後、いろいろな場で歌われ、広がっていくにつれ、作曲者の手により二部合唱版だけでなく独唱版、女声・男声・混声版に編曲され、合計16の曲集が編まれるに至っている。新実氏は作曲を始めてから15年を経て、

この曲集が「幅広い年齢層の方々に歌われ愛される存在となった」ことを受けて、『三世代りレー』で作られた歌がいつの間にか『三世代で共有できる歌』となった」と述べ、二部合唱曲集の増刷にあたり、副題「十代のための」を「三世代のための」と改題している。^{*10}

「白いうた青いうた」は初めは三世代のつながりを経て十代に歌われる想定だったのが、合唱する人々に育てられ、今日では幅広い年齢層に共有され人々を歌うことと聴くことでつなぐ曲集になっているのである。

3. 白いうた青いうたフェスティバルの実践について

(1) 鹿児島におけるフェスティバル活動の概要

「白いうた青いうたフェスティバル in kagomma」は2004年9月26日に第1回を行い、以後毎年開催している。2008年9月23日に第5回を開催した。

フェスティバルの企画・運営は「白いうた青いうたフェスティバル in kagomma 実行委員会」を組織して行っている。実行委員会のメンバーは鹿児島県内で合唱指導を行っている指導者や学校の音楽教師、合唱愛好者で構成されている。委員会には会長と実行委員長が置かれている。^{*11}

実施時期は前年度中に実行委員会で検討し決定している。その上で毎年4月に参加合唱団・公募合唱団メンバーの募集要項を発表し、参加団体を募るとともに公募合唱団を編成する。

フェスティバル当日は作曲者も参加している。

(2) 取り組みの工夫点と考察（資料1、2参照）

前項で述べた「白いうた青いうた」の特徴を生かし、世代間をつなぐ合唱活動とするために本フェスティバルで行われている工夫として次の四点を挙げることができる。

- ①幅広い種類の合唱団の参加促進
- ②公募合唱団の創設と運営
- ③工夫を凝らした演奏形態による取り組み
- ④作曲者と参加者の多様なふれあい

①幅広い種類の合唱団の参加促進

参加団体の募集に当たっては、過去の参加団体や鹿児島市を中心とした鹿児島県内の学校、鹿児島県合唱連盟加盟団体等、幅広く募集要項を送付し参加を呼びかけている。参加資格の規定は「児童合唱団、小・中・高・大学の合唱団、一般の合唱団など、あらゆるタイプの合唱団」としている。様々な歌唱形態（児童合唱団、学校の合唱団、女声、男声、混声等）が出演することで、「白いうた青いうた」の多様な世界があぶり出され聴き手としても味わうことができるからである。

資料1を見てわかるように、毎年成人中心の団体に混じり子どもの団体が3～4団体出演しており、参加世代のバランスは確保されていると言える。また鹿児島県以外の団体も第2回を除いて参加があり、歌声に多様さをもたらしている。ただし県外からの参加団体は第3回からは1団体と少なく、これを増やすことが一つの課題である。

一方、学校の団体という視点で見ると第1回と第2回では小学校の参加が1校あったが以後なくなっている。また中学校の参加は第4回のみである。高校の参加は第3回まであったが、以後なくなっている。このように学校の団体の参加が少ないのが残念なところであり、今後の課題と言えよう。これには学校行事の時期や部活動の活動実態（中高生の場合、コンクール参加や進路選択時期等）を考慮しての開催時期の工夫が必要と思われる。

また、参加団体数の制限の問題も無視できない。

少ないときは第2回のように8団体というときもあったが、第4回、第5回は14団体と、これまでで最高の団体数を記録している。しかし、フェスティバルを午後1時すぎから午後5時前までと考えると、これ以上団体数を増やせないのが現状である。

団体数を増やすと、一団体あたりの演奏曲数を減らざるを得なくなり、各団体の参加意欲に悪影響を及ぼす可能性もある。逆に参加団体を増やすためにフェスティバルの時間を延ばすという考えもあるが、子どもも参加している中で終演が遅くなることは好ましくなく、また午前中から行うと各団体の当日リハーサルができなくなるという

デメリットが生じる。

団体数をこれ以上増やすことなく、いかにフェスティバルを充実させるかという課題があると言えよう。

②公募合唱団の創設と運営

第1回から行われているこの取り組みは、本フェスティバルの柱の一つである。参加規定は、子どもから大人まで、「白いうた青いうた」を歌いたいという方（初心者でも歓迎）としている。そしてフェスティバル参加団体や前回までの公募合唱団参加者等に広くメンバーを公募し、幅広い世代で構成される合唱団を創っているのである。

練習指導は実行委員会で行うが、最終的には作曲者、新実氏がリハーサルを指導し、フェスティバル当日の指揮もする。作曲者と一緒に練習でき、演奏もできるという取り組みである。作曲者自身により「わらべが丘」と命名された。

筆者は2009年度第6回へ向けた最初の練習会の際、今年度の参加者にアンケート調査を実施した。初回ということもあり回収総数は29名である。

まず参加者の年齢層であるが、20代が3名、30代が5名、40代が4名、50代が9名、60代が4名、70代が3名、80代が1名であった。各世代がまんべんなく参加しているということがわかる結果である。

一方、参加の理由を4つの質問（複数回答可）で問うたところ、次のようになった。

- ・「白いうた青いうた」の曲を歌いたいから 17名
- ・作曲者と練習、演奏できるから 23名
- ・公募合唱団というスタイルに魅力を感じているから 13名
- ・幅広い年齢層と活動できるから 6名

楽曲の魅力もさることながら、やはり作曲者と共に練習、演奏できるというのが大きな動機となっているようである。

本公募合唱団への参加回数も調査したが、29名中4回目と5回目がそれぞれ6名、計12名と多かった。6回目という方も1名いた。これらリピーターの方々13名の参加理由をみると、一番多く挙げられたのは「作曲者と練習、演奏でき

るから」であり、12名で選択されていた。

この公募合唱団には、これまで継続的に40～60名ほどの参加者があるが、それは作曲者と共に練習、演奏できるという魅力故ということができよう。

また年齢も高校生から80歳を越えた方までと幅広い参加が見られたが、今回の調査でも年齢層の幅広さとまんべんない参加状況が確認できた。

「白いうた青いうた」を三世代で共有するという、まさに作曲者の思いが現実化されている取り組みであるといえる。

③工夫を凝らした演奏形態による取り組み

多様な歌唱形態の合唱団の参加以外に、第1回や第4回では独唱やヴァイオリンによる演奏が披露された。また第2回からは鹿児島大学音楽科の学生による管楽器や弦楽器のアンサンブル（名称「白いうた青いうたウィンドアンサンブル」 資料2、第2部の2参照）と合唱による共演のステージも加えられている。多様な演奏形態を味わえる、楽しめるということと共に、合唱以外の演奏ジャンルにいる若い世代との音楽の共有を実現している取り組みである。

④作曲者と参加者の多様なふれあい

本フェスティバルは、作曲者自ら参加するのが大きな特徴である。先に公募合唱団の取り組みでは、作曲者が最終的に練習を指導し、本番の演奏で指揮をすると述べた。それ以外にも作曲者と参加者がふれあう工夫を行っている。

一つは、オープニングとクロージングの全員合唱を作曲者が指揮する取り組みである。演奏曲の解説、指導を作曲者自身が行い、指揮を執っていただき、客席の一般聴衆も含め会場全体で歌うのである。作曲者自身の作曲に当たっての考えや楽曲への思いを参加者が共有する貴重な機会となっておりと同時に、フェスティバルの「場」全体が歌でつながる機会でもあり、「白いうた青いうた」の特徴が特に生かされている場面である。

もう一つは、各出演団体の演奏後に、作曲者が感想を披露し、また団体代表者との間で意見交換をするという取り組みである。思いをこめた演奏

に対して作曲者から直接、それも肉声でコメントをいただけるという機会はめったにあるものではなく、参加者にとって大変貴重な時間となっている。

4. 成果と課題

本研究は、「白いうた青いうた」の特徴と作詞者、作曲者がそれに込めた考え、思いをとらえ、その上で鹿児島県における「白いうた青いうた」の合唱活動である「白いうた青いうたフェスティバル in kagomma」の実践について考察した。

本研究の成果としては次のことが挙げられる。

- 「白いうた青いうた」の特徴をとらえた上で、それを生かした合唱活動としてフェスティバル活動を行ってきたことが確認できた。
- 「白いうた青いうたフェスティバル in kagomma」は、幅広い世代の参加を得、世代間をつなぎ、思いを共有することができる合唱活動であることを確認できた。幅広い世代が同時に学べる生涯学習の貴重な場であるということである。
- 公募合唱団の活動や工夫を凝らした演奏形態の導入、作曲者とのふれあいは、「白いうた青いうた」の特徴を生かした取り組みとして有効であった。

公募合唱団の参加者に行ったアンケートにも成果を確認できる次のような記述があった。

- ・子どもから、おじいちゃん、おばあちゃんまで参加できて、回数を重ねるごとに口ずさめる歌も増えて、とっても楽しいと思います。(30代女性)
- ・何よりも作曲者の指揮で歌えるのが最高。(40代女性)
- ・いろいろなグループの方々と一堂に会して同じ作品を歌えることの喜び、楽しさ、感動は他の演奏会では決して味わうことのできないものだと痛感しています。これからもずっと続けていただきたいと願っています。(50代男性)

一方、課題としては次の点を挙げることができる。

- 十代の参加を増やすためにも学校団体の参加を

増やすことが必要である。また鹿児島県外の団体の参加も促進することが望ましい。開催時期を絡めて検討していかなければならない。

●参加団体数は14団体程度が上限であると思われる。団体数は制限しつつ参加団体の多様性をより豊かにしていくことを追究していく難しさがある。

●選曲や演奏形態等、さらに工夫を重ねていく必要がある。

●フェスティバルの一層の充実のためにも、参加合唱団への調査等、さらに詳しい調査研究が必要である。

以上四点の課題を踏まえ、これまでの成果を活かしながら、各世代が共に学び、そして世代間がつながる合唱活動としてフェスティバルの質をさらに高めていきたいと考えている。

成20年度教育研究論文助成に投稿した「世代間をつなぐ合唱活動に関する研究」の内容に加筆、再構成したものである。

【注】

- * 1 第6回のフェスティバルは2009年10月に開催予定である。
- * 2 新実徳英 作曲, 谷川雁 作詞:「白いうた青いうた① 十代のための二部合唱曲集」, 音楽之友社, 1991年, 86頁
- * 3 同上, 2頁
- * 4 同上, 86頁
- * 5 新実徳英 作曲, 谷川雁 作詞:「白いうた青いうた②三世代のための二部合唱曲集」, 音楽之友社, 1993年, 2頁
- * 6 新実徳英 作曲, 谷川雁 作詞:「白いうた青いうた① 十代のための二部合唱曲集」, 音楽之友社, 1991年, 86頁
- * 7 同上, 83頁
- * 8 同上, 83頁
- * 9 同上, 2頁
- * 10 作曲者、新実徳英氏は増刷版の最後の頁に「『十代のため』から『三世代のため』へ」と題した一文を寄せ、副題変更の思いを記している。
- * 11 2008年度は会長を筆者が、実行委員長を合唱指揮者の菊村隆史氏が務めた。

【追記】本稿は、鹿児島県教育公務員弘済会の平

資料1 「白いうた青いうたフェスティバル in kagoma」のあゆみと出演団体

■第1回 2004年9月26日(日) 鹿児島県文化センター(現：宝山ホール)

- 成人中心の団体(鹿児島県内)
 - コール明和(鹿児島市)、鹿児島混声合唱団&白いうた青いうたカレッジワイア(鹿児島市)、女声合唱団さつま(鹿児島市)、女声合唱団彩華と和と子どもたち(鹿児島市)、アンサンブル・ブライト(鹿児島市)、男声合唱団Lagoon(鹿児島市)
- 子どもの団体
 - 西伊敷小学校合唱部(鹿児島市)、国分市少年少女合唱団(国分市〔現：霧島市〕)、鹿児島女子高等学校音楽部(鹿児島市)
- 鹿児島県外の団体
 - 熊本メールハーモニー(熊本市)、宮崎はまゆうコーラス(宮崎市)、リラの会(熊本市)
- 合唱団わらべが丘(公募)

※成人中心6団体、子どもの団体3団体、県外3団体、公募合唱団1団体、計13団体が出演

■第2回 2005年11月20日(日) 鹿児島市民文化ホール(第1)

- 成人中心の団体(鹿児島県内)
 - 女声合唱団彩華(鹿児島市)、鹿児島混声合唱団(鹿児島市)、男声合唱団Lagoon(鹿児島市)、コール明和(鹿児島市)
- 子どもの団体
 - 始良町立少年少女合唱団(始良町)、伊敷台小学校合唱部(鹿児島市)、鹿児島女子高等学校音楽部(鹿児島市)
- 合唱団わらべが丘(公募)

※成人中心4団体、子どもの団体3団体、公募合唱団1団体、計8団体が出演

■第3回 2006年11月12日(日) 宝山ホール(鹿児島県文化センター)

- 成人中心の団体(鹿児島県内)
 - 鹿児島混声合唱団(鹿児島市)、女声合唱団いしき(鹿児島市)、MV F “Lagoon”(鹿児島市)、混声合唱団グリーンエコー(霧島市)、コール明和(鹿児島市)、混声合唱団フリューゲルコール(鹿児島市)
- 子どもの団体
 - 霧島市国分市少年少女合唱団(霧島市)、鹿児島女子高等学校音楽部(鹿児島市)、始良町立少年少女合唱団(始良町)、
- 鹿児島県外の団体
 - リラの会(熊本市)、フラウエンコールなでしこ(高鍋町)
- 合唱団わらべが丘(公募)

※成人中心6団体、子どもの団体3団体、県外2団体、公募合唱団1団体、計12団体が出演

■第4回 2007年9月24日(月・祝) 鹿児島県加治木町文化会館(加音ホール)

- 成人中心の団体(鹿児島県内)
 - 国分女声合唱団(霧島市)、混声合唱団フリューゲルコール(鹿児島市)、コール明和(鹿児島市)、叙情歌フレンドリーみどり会(鹿児島市)、女声合唱団いしき(鹿児島市)、男声合唱団MCPC(鹿児島市)、混声合唱団グリーンエコー(霧島市)、女声合唱団コールそよ風(始良町)
- 子どもの団体
 - 霧島市国分市少年少女合唱団(霧島市)、始良町立少年少女合唱団(始良町)、鹿児島市立吉野中学校合唱同好会・鹿児島市立紫原中学校合唱部合同(鹿児島市)、加治木町少年少女合唱団(加治木町)
- 鹿児島県外の団体
 - 白いうた青いうたを歌い隊～そよかぜ～(都城市)
- 合唱団わらべが丘(公募)

※成人中心8団体、子どもの団体4団体、県外1団体、公募合唱団1団体、計14団体が出演

■第5回 2008年9月23日(火・祝) 鹿児島県加治木町文化会館(加音ホール)

- 成人中心の団体(鹿児島県内)
 - 女声合唱団コールそよ風(始良町)、鹿児島リベロアンサンブル(曾於市)、叙情歌フレンドリーみどり会(鹿児島市)、コール明和(鹿児島市)、混声合唱団グリーンエコー(霧島市)、混声合唱団コールのぼら(加治木町)、女声合唱団いしき(鹿児島市)、あいらマリーゴールド(始良町)、国分女声合唱団(霧島市)
- 子どもの団体
 - 始良町立少年少女合唱団(始良町)、加治木町少年少女合唱団(加治木町)、霧島市国分市少年少女合唱団(霧島市)
- 鹿児島県外の団体
 - リラの会(熊本市)
- 合唱団わらべが丘(公募)

※成人中心9団体、子どもの団体3団体、県外1団体、公募合唱団1団体、計14団体が出演

資料2 プログラムの例 (第4回のプログラムより)

オープニング(全員合唱)

二十歳 指揮: 新実 徳英 / ピアノ: 日吉 武

第1部 みんなで歌おう、「白いうた青いうた」

1. 霧島市国分少年少女合唱団 指揮: 山崎 咲代 / ピアノ: 森藤 比呂子
ともだちおばけ ほくという名のひとり ほくは雲雀
2. 国分女声合唱団 指揮: 巻木 春男 / ピアノ: 徳永 歩
しらかば なまずのふるや いでそよ人を
3. 混声合唱団 フリューゲルコール 指揮: 西澤 明 / ピアノ: 中村 かつみ
夜と昼 ライオンとお茶を
4. 始良町立少年少女合唱団 指揮: 野間 淳 / ピアノ: 有川 喬子
こびとのひげ はたおりむし 自転車にのげる
5. コール明和 指揮: 田丸 寛 / ピアノ: 猪俣 裕子
ふたりで 夢幻 夏のデッサン
6. 鹿児島市立吉野中学校合唱同好会・鹿児島市立紫原中学校合唱部 合同 指揮: 竹内 聖子 / ピアノ: 前田 佳穂
傘もなく 落葉 ほくという名のひとり
7. 叙情歌フレンドリー みどり会 指揮: 中島 みどり / ピアノ: 山田 たか子
南海譜 しらかば

休憩(10分)

第2部 「白いうた青いうた」の楽しみ方

1. 独唱による「白いうた青いうた」の世界 ソプラノ: 田中 咲子 / バリトン: 高田 聡一郎 / ピアノ: 重松 一大
独唱とピアノのための「白いうた青いうた」より
島原 北のみなしご 壁きえた
2. 「白いうた青いうた」を、ウィンドアンサンブルで。 指揮: 新実 徳英 / ピアノ: 日吉 武
白いうた青いうたウィンドアンサンブル + 出演合唱団有志
南海譜 ちいさな法螺 卒業

休憩(10分)

第3部 みんなで歌おう、「白いうた青いうた」

1. 加治木町少年少女合唱団 指揮: 北園 沙織 / ピアノ: 横手 泰枝
ほくという名のひとり なぎさ道 忘れ雪
2. コールそよ風 指揮: 野間 淳 / ピアノ: 濱崎 正子
青い花 南海譜
3. 男声合唱団MCPC(鹿児島大学混声合唱団ポリフォニー・コール 男声有志)
ぶどうとかたばみ ボスニア・ヘルツェゴビナに アルデバラン
4. 混声合唱団グリーンエコー 指揮: 日吉 武 / ピアノ: 森藤 比呂子
このみちゆけば 傘もなく 卒業
5. 白いうた青いうたを歌い隊 ～そよかぜ～ 指揮: 菊村 隆史 / ピアノ: 五條 比呂美
十四歳 ともだちおばけ 南からの人々 北極星の子守歌
6. 女声合唱いしき 指揮: 中島 みどり / ピアノ: 山田 たか子
青い花 夏のデッサン
7. 合唱団わらべが丘 指揮: 新実 徳英 / ピアノ: 日吉 武
火の粉 春 あしたうまれる 恐竜広場 卒業

クロージング(全員合唱)

卒業 指揮: 新実 徳英 / ピアノ: 日吉 武